

---

# 風葬

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風葬

### 【Nコード】

N5713H

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

風葬の話聞いて教授と共にまだそれが行われているという山の頂上の村に来た私が見てしまったものとは。実際に昔はこんな話があったのかも知れません。

## 第一章

### 風葬

私がこの村に來たのは教授から言われたからだ。思えばこの時から妙なものがあつた。

「風葬ですか？」

「それは知っているね」

教授は私に対してまずはこう語り掛けてきた。いつものように穏やかでかつ知的な声で。私もいつもいる教授の研究室はその壁の全てを本で覆われコーヒーマシンの上品な香りの中にあつた。教授はこのソファに浅く座り向かい側にいる私に対して語り掛けていた。

「つまり。死者をだ」

「あえて空けた場所に置いてそこで鳥に食べさせるのですね」

「その通りだ。それだ」

「ですが今それは」

私はここで教授に対して言った。

「もうないのでは？法令で禁止されているでしょうし」

「私もそう思っていたよ」

ところが教授はここでこんなことを言ってきた。

「今まではね」

「といますと！？」

私は教授の今の言葉に右の眉をびくりと動かした。今の言葉からあるものを感じ取ったからである。

「そうではないと」

「そうだ。どうやらまだ行われている地域があるのだよ」

「御言葉ですがそれは」

私はまた教授に問うた。問わずにはいられなかった。

「我が国でのことですか？」

「そうだ、我が国でだよ」

「まさか。そんなことが」

博士はそれを聞いてもまだ信じられなかった。嘘だとしか思えなかった。

「有り得ません。今時風葬とは」

「それでだ。君に頼みがある」

そしてまた私に言ってきたのだった。

「私と一緒にその地域に行ってみないかね？」

「そこにですか」

「そうだ。私は行くつもりだ」

教授は既にそれを決めているのだった。

「一人でもな」

「そうですね。行かれるのですか」

「それで君はどうする？」

あらためて私に尋ねてきた。

「無理強いはしないが。どうするかね？」

「そうですね」

私はまず一呼吸置くことにした。その間に考えをまとめる為だ。

そうしてそのうえで私が出した結論は。

「御一緒させてもらって宜しいでしょうか」

「それでいいんだね」

「はい、興味が沸きました」

こう言うと子供の様だと言われるかも知れない。しかし結局のところ学者というものはそれに対して興味があるかないかだけだ。それがなくては学者ではない。

「是非御願います」

「わかった。それではすぐに手配の用意をしよう」

こうして私と教授はその地域に向かうことになった。そこは見渡す限り山が連なっている深い場所であり人なぞいないようにも思われた。私はその深い山の中を進みながら一緒にいる教授に対して尋ねた。周りに見えるのは木とその下の草ばかりで山道を見つけるこ

とさえ容易ではない。人がいるとはとても思えない場所だ。私達は  
その山の中を寝袋やそういつた野宿の道具を全て背負ってそのうえ  
で進んでいた。

「こんなところに人がいるんですかね」

「それがいるんだよ」

教授は私の前を進みながら述べてきた。

「ちゃんと戸籍にも載っているよ」

「戸籍にもですか。それじゃあ」

「いるのは間違いない」

このことが私にはつきりと告げられた。

「この山の中にな」

「あれですか」

私は教授の今の話から自分の知識を検索しそのうえで述べた。

「平家の落人の」

「いや、それがはつきりしないようだね」

だがこれは否定された。平家の隠れ里はそれこそ西国のあちこち  
に存在している。極端なものでは奈良県にすらある程である。当時  
の都から程近い場所にあったそこにもだ。

「鬼が作ったただの天狗だの色々言われていて」

「鬼に天狗」

私はその話を聞いて首を傾げずにはいられなかった。山道を歩く  
ことに苦労しながら。

「またそれは」

「他にも土蜘蛛だったかな。とにかくその辺りははつきりしない」

「まつろわぬ民とかそうしたものだったのでしょうか」

所謂大和朝廷に反抗していた民族のことである。こうした存在の  
ことは古事記や日本書紀にもある。

「それでは」

「おそらくそうだと思うが確証はないな」

これが教授の私の問いに対する返答だった。

「残念なことにな」

「ですか」

「ただ。風葬か」

教授もまたこのことを意識せずにはいられなかったのだ。自身の口からもこの言葉を出してきたのがその何よりの証拠だった。「確かにどんなものか見てみたいな」

「そうですね」

これは本当に私も同感だった。

「普通はネパールの辺りにあるものが有名ですが」

「あの辺りの風葬は岩場に置いておいて鳥の餌にする」

教授は当然ながらこのことも知っていた。

「この辺りのものもそれかな」

「そうかも知れないですね、確かに」

私もそうではないかと考えていた。風葬といえそれがあまりにも強くそのイメージに残っているからだ。そもそも風葬自体が少ない風習である。

「ここでも」

「うむ。それを確かめる為にもな」

二人でその村に向かうのだった。それから一日かけてやっとある山の頂上にあつた村に辿り着いたのだった。本当にやっとだった。

ざっと見たところ五十戸はあつた。かなり少ない。かろうじて電気は通っているようで家々にはアンテナが見られた。しかし水道はかなり怪しく井戸が見られた。

「水はあるみたいですね」

「そうみたいだな」

教授は私の言葉に頷きながらその村を見回していた。

## 第二章

「だからここに村がある」

「けれど田はないようですが」

「畑か」

見れば村の外れに畑が見られた。それで農作物を手に入れているのがわかる。

「もう少し調べてみないとわからないがな」

「そうですね。それじゃあ村の人に」

「おや、あんた達は？」

入り口でそんな話をしているとだった。ここで一人の老人がやって来て私達に声をかけてきた。腰の曲がった髪の毛が一本もない老人だった。

「何処から来られたのかね？」

「あつ、はい」

「私達は」

私達はすぐにその老人に対して応えた。まずは風葬のことは伏せてただ風俗習慣を調べに来ただけ話した。そうしてそのうえで老人の家に招かれその中で三人で話をした。

老人の家は昔ながらの家だった。土蔵があり土手もある。そして井端もあった。私達はその井端を囲みそのうえで三人で胡坐をかいて話に入った。

「この村はですな。あれです」

「あれとは？」

「平家の隠れ里です」

こう私達に話してきた。

「その時からの村なのですか」

「そうですね。その時からの」

「採れるものは麦だけです」

続いて話すのは食べ物についてだった。

「米は水があまりありませんので」

「あまりですか」

「それで麦です」

これはよくわかった。米には多くの水が必要だ。見たところこの村は山の頂上にある為に確かに井戸はあっても水は少なそうだ。それを考えれば麦なのもわかることだった。

「麦を食べています」

「今もですか」

「そう、今もです」

こう私達に穏やかな声で話してくれた。私達は老人の話の間頃合いを見て部屋の中を見回す。まるで戦国時代からあるような木の床に古ぼけた障子があり天井はそのまま屋根になっていて家の骨組みまで見える。そうしたとても古い家なのがよくわかった。

「今も麦を食べています」

「そして野菜もですね」

「はい、野菜もです」

老人はこのことも穏やかに話してくれた。

「肥料は昔ながらのです」

「そうですね」

私達はこれだけでその肥料が何かわかった。所謂堆肥である。それも人の。

「そうして昔ながらの生活をされているのですね」

「その通りです。まあ今はかなり人も減ってしまいましたが」

「ですか」

私はそれを聞いて過疎という言葉思い出した。やはりそれはここにもあるのだった。これは二十世紀後半から今に至るまでよく見られていることである。

「それでも残っている者は残っています。大体二百人程度ですか」  
「二百人ですか」

「それだけの食べ物もあるのですね」

「ええ、あります」

老人はまた私達に穏やかに答えてくれた。

「何とかですがやっていっていますよ」

「麦があり野菜もあり」

私は老人の話聞きながら呟くようにして述べた。

「それと肉は」

「魚は採るのに苦労しています」

老人は苦笑いになって述べてきた。

「山の下にある川までいってそれですから」

「そうですか」

「あとは猪に鳥に熊に」

話を聞いてそれが狩猟によるものだとわかった。こうした隠れ里のようなところではそうして肉を手に入れるしかないのだから。

「それとあれですか」

「あれとは？」

「それは時々手に入ります」

「こつ私達に話をしてきた。」

「時々です」

「時々？」

「はい、何しろ食べ物を手に入れるのに苦労する村ですから」

老人はふと妙な笑みを浮かべてきた。何故かその笑みには奇怪なものを感じた。そしてそれは私だけでなく教授も同じように横目で見てみると妙な目の色をしていた。

「それも有り難いことです」

「それは一体？」

「ひよつとしたらそれを食べられるかも知れませんが」

老人の奇妙な、いや奇怪な笑みはそのままだった。

「もうすぐね」

「もうすぐですか」

「まあ今日はゆっくりとお休み下さい」  
老人はここで話を終わらせてきた。

### 第三章

「布団を用意させてもらいますので。あとは食事ですが」  
「はい」

「それもあります。麦と野菜の粥ですが」  
こうして私達はその麦と野菜や山芋の粥を食べてそのうえで一室に用意してもらった布団に入って休んだ。布団に入りそのうえで私は暗がりの中教授に対して声をかけた。

「どう思います?」

「どうとは?」

「この村自体のことです」

私がいまず教授に声をかけたのはこのことだった。

「この村について。どう思います?」

「正直驚いている」

これが教授の返答だった。

「今頃こんな村があるとはな」

「ガスも水道もありませんでしたね」

「それももう滅多にない」

これは本当にである。今頃そうした場所がこの日本にあるということも私達にとっては驚きだった。

「寺や神社もあることにはあるが」

「小さいですね」

「小さい村だからそれも当然か」

教授はこうも考えていた。

「しかし。それにしても」

「何ですか?」

「いや、御老人が話していたことだ」

先程の会話のことを話してきたのだった。

「時々手に入る肉か」

「それですね。何なんでしょうか」

「わからないな。魚を獲るのは確かに大変だが下の川にいければ獲れる」

「魚じゃないのは間違いないですね」

「猪や鳥やそうしたものでもない」

「これもわかることだった。狩りの話がそこでも話されたからだ。」

「だったら何だ？本当に」

「わからないですね。けれど何か御老人のお話ですと」

「それが手に入るか」

「私達はこのことも話したのだった。」

「余計にわからないがそれでもな」

「そうですね。とりあえず暫く様子を見ますか」

「あとは風葬だな」

そのうえでここに来た本来の目的についても話をした。

「それについても御聞きしたいな」

「はい」

そんな話をしてから私達は眠りに入った。翌日朝起きると昨夜の麦のお粥の残りをいたぢあた。当然老人と三人で食べた。その朝食を食べ終える老人は私達に対して静かに言ってきた。

「これからですが」

「何かありますか？」

「実は村で人が死にました」

「こつ私達に話したのだった。」

「隣の婆さんが寿命で」

「お亡くなりになられたのですか」

「はい、まあ仕方のないことです」

老人は明らかに寂しがつているがそれを達観で受け入れている顔になって私達に述べてくれた。それは歳、それに人生経験を見せてくれる顔であった。

しかしそれと共にもう一つ何かがあるような。そうしたこと感

じさせる不思議な、いや奇妙な顔を見せていた。何か明らかにあるような。

「それにです」

「それに？」

「まあその話は後で。それでですね」

話を打ち消したうえでまた私達に言ってきたのだった。

「その婆さんの葬式ですが」

「あつ、はい」

「お葬式ですか」

それを聞いて私達は目だけで合図をした。やった、と内心思ったと言えば不謹慎である。しかしそれでも目的が果たせることに喜んだのは事実である。

「そうです。宜しければ御一緒にしませんか？」

「あの、ですが」

「宜しいのですか？」

私達は自分の感情を必死に隠してそのうえで老人に尋ねた。

「私達の様な余所者をお招きしてもらって」

「それは」

「いえいえ、この村のしきたりです」

老人は軽く笑ってまた私達に話してきてくれた。

## 第四章

「村に来てくれたお客人は何でも参加してもらおうと」

「そうなのですか」

「無論お嫌なら結構です」

こうは言われた。

「無理強いはしませんが如何ですか？」

「教授」

私は老人の言葉を受けてあらためて教授に顔を向けて問うた。

「ここはやはり」

「そうだな」

そして教授も私の言葉に対して頷いてくれた。

「ここはな」

「そうさせてもらいましょう」

「御一緒に頂けますかな」

「はい、是非」

教授が老人の問いに答えた。

「御願います、それでは」

「わかりました。それではですね」

こうして私達はその葬式に参加してもらおうことになった。朝に話が決まり式は昼にということだった。私達は昼までの間布団を敷いてもらった部屋で休みそこで話をした。

「まさか今日いきなりだとはな」

「意外ですね」

話は長引くと思っていただけにこの展開は正直有り難かった。不謹慎を承知で告白させてもらおうと。

「だが。これで風葬を見ることができるな」

「そうですね。しかし本当に風葬が行われるのでしょうか」

「少なくとも聞いた話ではな」

それは聞いている。しかし本当にそれが行われるかどうかはまた別の話で私達はそれも承知しているつもりだった。それについても覚悟はしていた。

「本当はなかったにしろこの村は」

「はい、それだけで研究対象になります」

このことも二人で確認し合った。

「これだけ独特な村ですと」

「そうだ。とりあえず見聞きしたことは書き留めておいて」

「後で論文にしましょう」

私達は昼までの間村を見回り調べることにした。調べれば調べる程独特の村だった。高齢者が多いのはこうした村の特徴だった。しかしそれ以上に田がなくまた水を井戸に頼っておりしかも家畜も碌にいないということもかなり独特なものであった。

山の頂上にあるということだけでも独特だがあまりにも昔ながらの村ということに内心驚いていた。そうして様々なことを見てそのうえでまた部屋に戻って書き残していると。ここで老人が部屋の障子のところに来てくれてそつと声をかけてくれたのだった。

「もし」

「あつ、はい」

「時間ですか」

「そうですね、宜しいでしょうか」

障子の向こうから丁寧な声をかけてくれたのだった。

「それで」

「わかりました。それでは」

「御願います」

喪服は向こうで用意してもらった。和服の袴である。丈は残念ながら合わなかったがそれを着て列席した。葬儀は僧侶が行いその老婆は棺に収められていた。葬儀が終わると一旦村を出て隣の山に向かうのだった。

「隣の村で、のようですね」

「そうだな」

教授はまた私の言葉に頷いてくれた。

「そこですか。いよいよな」

「そうですね。あれです」

あえて風葬とは言わなかった。周囲の村の人達の耳を気にしてだ。

「じゃあいよいよ」

「見られる」

こうひそひそと言い合いながら足を進めていった。そうして辿り着いた隣の山の頂上は開け何処か祭壇を思わせるものがあった。そこに老婆の棺を置き蓋を開ける。それで皆去っていくのだった。

## 第五章

それを見届けてから私達は老人の家に戻った。そのうえで見たことを一部始終書き残しそのうえで。あらためて二人で話をするのだった。

「とりあえず風葬なのは事実でしたね」

「そうだな。しかし一つ気になることがあったな」

「気になること？」

「風葬は亡骸を置くと皆去る」

教授が言うのはこのことだった。

「しかし二人残っていたな」

「そういえば」

私は教授の言葉でこのことを思い出したのだった。そういえば二人程後に残っていた。その中には私達を泊めてくれているこの家の老人もいた。

「あれはないのだが」

「見届け人でしょうか」

私はあまり考えることなく述べた。

「あれは」

「そうか？風葬にそんなものがあるのだろうか」

しかし教授は私の言葉に首を捻るのだった。

「普通は置いてそのままにするのだが」

「そういえばそうですけれどね」

私は教授の言葉を聞いて首を傾げた。首を傾げながらどうしても首を傾げずにはいられなかった。言われてみれば確かに、だった。

「じゃああの人は」

「わからないな」

「ですね」

結局こういう結論になってしまった。私も教授もあの二人の人達

の存在には首を捻るばかりだった。そしてそれだけではなかった。暫く経って夕食の時間になった。そのまま腕を組んで座り込んだ姿勢であれこれと話している私達にまた老人が声をかけてきた。昼と同じく障子の向こう側からだった。

「もし」

「あつ、はい」

「何ですか？」

「夕食ができました」

そういえばそんな時間だった。話を聞いてすぐに思い出した。

「暖かいうちにどうぞ」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ、それでは」

私達は返事をしてまずは顔を見合わせた。そしてまた話をするのだった。

「とりあえずは食べますか」

「そうだな」

また頷き合う私達だった。そうしてそのうえで立ち上がって居間に向かった。井端では鍋が煮られていた。中に入っているのは葱や大根、それに蒟蒻に白菜といったものにピンク色の肉だった。そんな肉は見たこともなかった。こんな色の肉は本当にはじめて見た。

「?この肉は」

「何ですかね」

私達はその肉を見て話をするのだった。

「猪?違うな」

「ちょっと違う肉質ですよね」

「ああ」

見ればそうだった。

「かといって鳥でもなさそうだし」

「何ですかね」

「ははは、まあ召し上がって下さい」

しかし私達を案内してくれている老人は明るく笑って私達に話してきた。

「特別に入った肉ですよ」

「特別？」

私も教授もその話を聞いてまた首を傾げさせてしまった。眉もしかんでいるのがわかる。そのうえで老人の話を聞くのだった。

「どんなお肉ですか、一体」

「猪でもないようですし鳥でも」

こんなピンク色の肉ではない。しかも何か脂肪のつき方が妙だしそれに目の玉まで入っているがそれはと鳥にしては大きいし猪のものにも見えるが何か違う気がする。それにやけに筋ばっている肉の質なものも見えていた。まるでかなり年老いてしまったかのように。

## 第六章

「これは一体」

「何ですか？」

「昨日お話ししましたよね」

ところが老人はまた笑って私達に話してきたのだった。

「特別に肉が入るかもと」

「まあそうですよ」

「そういえば」

言われてみればそうだった。確かにその話は聞いた。しかしそれが何かは実はよくわからなかった。だが肉は確かに出て来ていた。

「じゃあこの肉がですか」

「それなのです」

「そうです。ささ」

老人は答えながら私に尋ねてきた。

「召し上がって下さい」

「はい、それでは」

「わかりました」

私達は老人の言葉を聞いてそのうえで井端を囲んで座わりそのうえで箸と椀を手にとってその鍋を食べはじめた。当然その肉もだ。肉はどうも牛肉と豚肉を合わせたような。そんな妙な味がした。やはりそれは私達の全く知らない食べたことのない肉だった。

「如何ですか？肉は」

「この肉は」

「変わった味ですね」

それに妙に筋ばっている。食べてみてまた思っのだった。

「はじめて食べますよ」

「このような肉は」

「ははは、そうですよ」

老人は私達の話聞いて笑ってきた。何処か楽しそうに。

「それは。この村でしかないものかも知れませんか」

「この村にですか」

「私達にとつても特別な肉です」

老人はまた私達に話をしてくれた。特別と聞いてもやはりわからない。職業柄今までフィールドワークであちこちを回っているがその時にかなりの種類の肉を食べてきた。しかし本当にこんな肉ははじめてだった。どんな家畜でも獣でも鳥でもない。まして魚でもなかった。

「そうです。誰かが死んだ時にしか食べられないような」

「食べられない？」

「誰かが死んだ時に」

私達はそれを聞いてまた首を傾げさせた。それを聞いてまずは儀礼的に食べられるものかと思った。だがそれが違うらしいということも老人の表情からわかった。

「食べられるものです」

「誰かが死んだ時に」というとそれでは

教授が老人に問うた。

「儀礼として食べるのですか？」

「いえいえ、違いますよ」

しかし老人はそれを笑って否定するのだった。

「この肉は有り難い肉ですよ」

「有り難い？」

「そうです。誰かが死んだ時に」

そしてまたこのことを私達に話してきた。

「見送ってそれから食べるものです」

「見送る？」

「それから？」

「そう。つまりこれは」

ここで話が変わった。少なくとも私達の間では。老人はそのうえ

でまた話してきたのだった。

「そう、昨日死んだ婆さんのものですよじや」

「!!!」

私達はそれを聞いて絶句した。その瞬間に手に持っていた箸と椀を落としてしまった。中に残っていた肉と汁が床を汚すがそれはもう目に入らなかつた。

「この村は貧しい村です」

老人は少し寂しそうに語ってきた。

「食べるものも少なく。特に肉は」

その肉の話だった。

「そうそう手に入るものじゃありません。獣にしろ鳥にしろいつも捕まるわけではなし」

そしてそれはそのまま村にとっては死活問題になる。食べ物が少ないければ当然のことだ。私は啞然としていたがそのことは自然に頭の中でわかつた。

「それで食べはじめました。死んだ者の肉を」

「な……」

「いやいや、人は死んでもそれでは終わらない」

老人はここでは妙に楽しそうに話してきた。

「その通りですなあ、本当に」

そしてまた私達に言うのだった。

「ささ、本当に特別にしか食べられない馳走です。どうぞどうぞ」

私達の記憶はここから途切れている。おそらく血相を変えて老人の家も村も山も飛び出たのだと思う。気付いた時には朝になっていてその山からかなり離れた別の山にいた。荷物だけは持っていてそのうえで身体中汗まみれだった。私も教授もそれから思いきり吐いた。

このことを信じてくれる人はいないかも知れない。しかしこれは本当のことだ。まだ日本には風葬が残っていてそして肉を食べるならわしも残っている。私と教授が体験したこのことは今まで誰にも

言ったことも書いたこともない。だが今ここでこのことを書いておきたい。信じてくれるかどうかは別として真実のこととして。

風葬 完

2009・5・18

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5713h/>

---

風葬

2010年10月8日15時04分発行